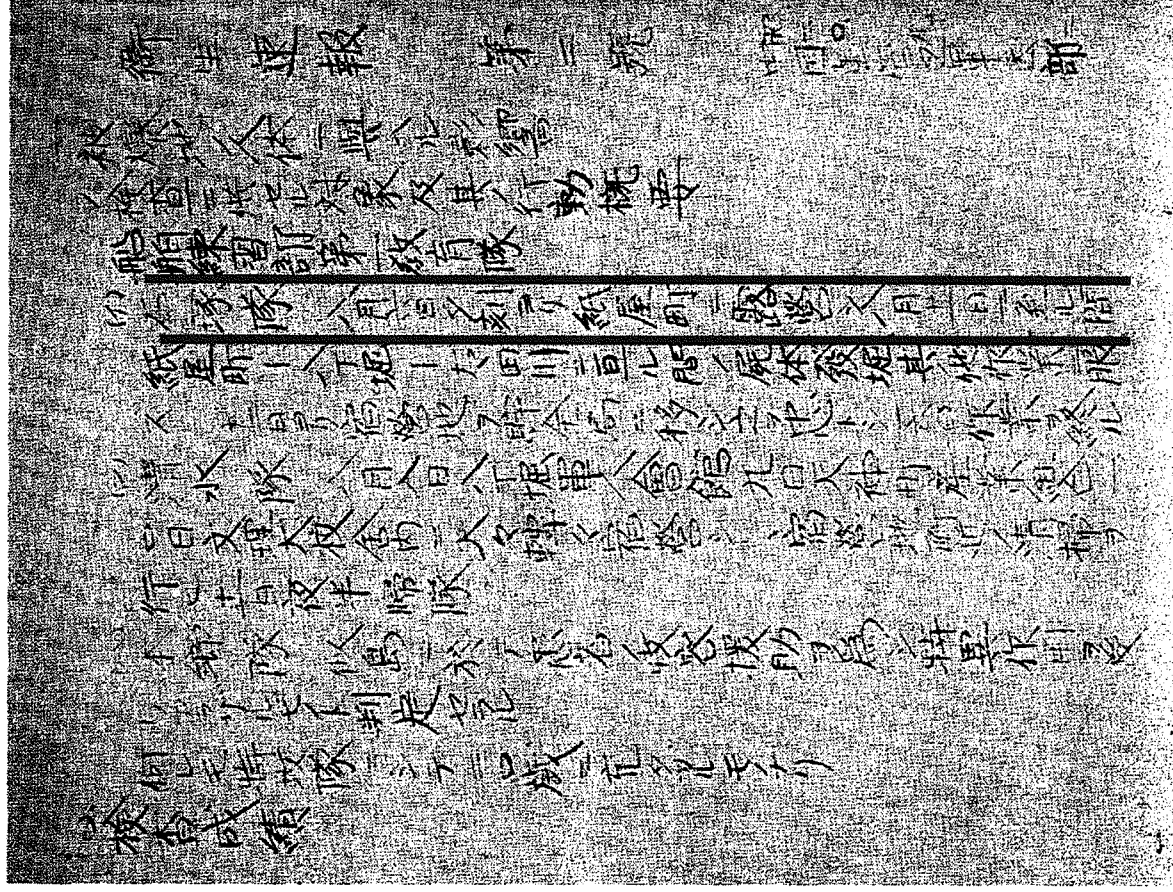


8月6日当日、軍隊が市内に入った。市民も。

1. 船舶教育隊(石塚隊)が当日夕刻より紙屋町、八丁堀の間の屍体発掘作業(衛生速報、第2号20年9月2日)
2. 昭和50年被爆者実態調査で7,033人の当日入市が記録されている。



広島原爆被災誌 第五卷 資料編 S46.12.8発行

目次

四

四、炎のなかに

三七九

当時、動員学徒として、第二総軍及び中国軍管区司令部に出動して被爆した生存者の「原爆で逝った級友の二十五回忌に於て」作られた体験記集で、猛火迫る司令部の地下壕指揮連絡室から、広島全滅の第一報を九州の第十六方面軍（福岡）などに、三か所に、電話報告したことなど、貴重な証言が多く、また炸裂下、軍の中枢機関の惨状を如実に伝えている。一九六九年八月六日 旧比治山高女第五期生の会発行

五、被爆者救援活動の手記集（暁部隊）

四一九

被爆直後の暁部隊の活動記録で、本誌刊行にあたり提供された当時の将兵三九人の体験記集である。猛火狂う被爆当日、いち早く救援隊として進入した広島市の凄惨な光景が、なまなましく記録されている。

六、（県政）雑記帖

五六七

被爆直後、豊田郡地方事務所長から広島県人事課長（食糧対策委員）に就任し、県の被爆救援対策・復旧対策などにあたった竹内喜三郎の事務覚書で、八月七日から九月二十一日まで、大混乱時における食糧対策を中心とした県行政の克明な記録である。

七、比治山国民学校迷子収容所・五日市戦災児育成所

六三三

被爆直後、家や肉親を失い、路頭に迷っていた幼少年を収容した記録で、心にしみる保

当日入市の軍隊記録

は分っていたが、見るに忍びず水を吞ませると、目前でそのまま息絶えた。

乗用車の損傷したものの一輛を苦心して修復し、二、三日連絡用に使用していたが、県庁の所有と判りお返ししたこともあった。真夏のこととて、死体は直ちに腐敗し、衣服は焼けてその処理に追われ、申し訳ないながら氏名の確認等は到底できなかった。

若干日後、漸く破損家屋の下敷きになっている人々の処理に手をつけたところ、思うようにはかどりはしなかった。又逐次消防団等の組織が動きはじめたが、八月十四日夕、江田島へ引揚げの命を受けて、幸ノ浦へ帰投した。

右、八月六日より十四日迄全員、広島市内に露営して作業に当った次第である。

復員後、私自身には異常はないが、所属下士官の一人が、悪性貧血で発病後、二か月位して死亡した。しかし、田舎の医者にかかっていたため、原子爆弾による障害とは認めてもらえなかった

九

齊 藤 義 雄

(当時 船舶練習部第十教育隊長・陸軍少佐)

一か月に一回の帰宅休養の夜を、空襲警報に乱されて、寝過ごした昭和二十年八月六日(月曜日)の朝八時頃、警戒警報が発令されたが、暫くして解除されたので、安芸郡中山村(現広島市中山町)の家族の疎開先の家を出た。この日、空は一点の雲もなく晴れて暑かった。中山から尾長に越える峠道を登って行くと、B 29のいつもの特色のある唸り

中略

った。当時船舶司令部で運航していた船である。便乗して来た娘さんを見ると、肩、片腕、背中の薄皮がペロリとむけて大きくぶら下がっていた。当人は比較的元気であったがその後どうなったことであろうか。海上から振り返ると広島市は東から西まで火煙の切れ目がないように見えた。焼夷弾の集中攻撃を受けて、一夜で東京の下町が焦土と化した昭和二十年三月の空襲をこの目で見た私には、一発で広島全市が火の海となったことが、不思議に思えてならなかった。よほど特殊な強力な爆弾であることは、想像出来たが……。海面は平素とかわりなく、美しく静かにキラキラと光っていた。

午前十一時少し前であったか、部隊に到着した。隊員が一名、硝子の破片で手に軽傷を受けたのみで、人員その他に異状のないこと、広島市に出ていた将校三名がまだ消息不明であること、似ノ島検疫所の要請により、約五十名の隊員を派遣したこと等の報告を受けた。当時私は、船舶練習部第十教育隊長として、江田島北岸の幸ノ浦に基地を置き、陸軍海上挺進戦隊の訓練を担当していた。海上挺進戦隊は、既に比島及び沖繩における戦闘で、相当の戦果を収めていた陸軍の海上特攻隊であり、本土決戦を予期して日夜の別なく猛訓練を実施していた。本部、整備隊と、十二個の訓練中の戦隊があり、総計約二千名の秘密部隊であった。

広島市の火勢はますます強く、幸ノ浦から眺めると、全市火の海であったが、広島市が全滅的打撃を受け、軍隊、警察、消防団等組織的団体が、完全に機能を停止したとは知らなかった。午前十一時過ぎであったか、船舶司令官佐伯中将から、直接の電令が私にあり、「広島市は全滅的打撃を受けた。君の部隊は、訓練も大切だが一時中止して、全力を以て、広島市の救援に行け。」との命令である。既に準備命令は受けていたので、直ちに全戦隊長を集めて、状況を説明し、なるべく速かに広島市に進出して、救援作業に当る旨を指示し、幕僚に細部の指示を委せて、私は船舶司令部に先

行し、細部の指示を受けるため現地向った。命令された救援地域は、東は京橋川から、西は本川に亘る、市の中央地域であった。白島地区には船舶練習部教導隊が配置された。中央部地域の全般指揮は、船舶練習部長芳村中将がとり、東部地域は沢田中将が全般指揮をされたが、西部地域の状況は不明であった。

広島電鉄本社の一階を借用して指揮所とし、斉藤部隊本部の標識を掲げて、救援業務を本格的に開始したのは、火の衰えはじめた午後三時過ぎであったろうか。既に作業を開始していた戦隊もあったが、逐次到着する各戦隊を、次々展開させて作業を命じた。現地に進出した頃には、市の中心部でも火災をあげている建物や、煙の上がっている場所が多く、市内を元気に動き廻る人は、あまりなかった。広島電鉄本社の建物は、天井がぶら下り、建具はなく、机は散乱し、硝子の破片が床、机に一面に光っており、柱や壁にも無数の破片が、突き刺さっていた。部屋の中に居た人達は、恐らく相当の負傷をされたものと想像された。各戦隊が、当初着手した作業は、地区によって異なるが、爆心に近い戦隊は、道路の啓開と死体の捜索、収集であり、比較的爆心を離れた地区では、収容所の開設と負傷者の収容、看護及び道路の啓開であった。部隊の特性上、特別の器材もなく、作業は困難を極めたが、それぞれに工夫して必死の活動をした。爆心に近い場所の死体は、眼球が飛び出ている、皮膚は茶褐色の黒みがかかった色をし、水気はなく、苦悶を示す色々な姿態をして倒れていた。高熱による焼死が先か、爆圧による圧死が先か、いずれにしても、想像を絶する一瞬の光と圧力による即死と思われる。焼けた電車の中の死体は死亡した後には電車と共に焼けたものか、電車の火災によって死亡したものか不明だが、白骨化してはいなかった。河、古井戸、水槽、池等水のある場所には多数の死体があったが、即死しなかった人達が、火災を避けて、水を求めて行って、力尽きたものであろう。負傷者は収容所に集め、舟艇及び自動車によって、似ノ島・金輪島その他の大きな収容所に護送した。赤十字病院にも多数の負傷者を収容したが、収容